

している。3. 紅山文化は、細石器文化と仰韶文化から相互に影響を受けたのち発生した新しい文化の可能性があり、細石器文化と仰韶文化の両方の要素を含んでいる。あるいは細石器文化と仰韶文化の接触後に生まれた典型的な混合文化の一種である。4. 紅山文化は、この地区独特の特色を持つ新石器文化の一種であり、独自の発生・発展過程がある。また、その発展過程では、他の文化の影響を受けていた⁽²⁾。

さらに、紅山文化の基本的特徴は以下の4点に要約することができる。

1. 石器の使用量が多い。各遺跡からは土器よりも石器が多く発見され、磨製および打製石器が細石器と共存する。かつ大型石器や打製と磨製の技術もまた重要である。細石器では凹底型の底部二等辺三角形の石鏃にもっとも特色がある。研究者はまた、紅山文化の大型石器を主とする石器群の多くが農業生産に関係していることや、伐採器や耜などの道具が多く、耕地に手を加える道具——鏟類が少ないことを発見した。このことは耕作面積が広く、また粗放であった可能性を示す。細石器と局部打製石器は肉や皮をカッティングすることと関係しており、牧畜が重要な地位を占めていたことを示している。こうした状況は、紅山文化が農業と牧業との結合を主とした定住生活社会であったことを物語ってい



写真3. 「紅山文化」の名称の起こりとなった紅山の景観（赤峰市、紅山の山中に多くの遺跡が残されている。）

る。

2. 主な土器には泥質の紅陶と砂混じりの灰陶（粗製土器）とがある。砂混じりの灰陶は、「之字文」を施した深鉢形の甕が主となる。

3. 玉器は大型の玉を主としており、多くは埋葬品として、石棺墓から出土している。器形の多くは動物の形をしており、組み合わせて使用され、原始的な玉制度が出現していたことを示している。

4. 住居跡はすべて正方形で竪穴式、中に炉跡を有する。

紅山文化の墓葬は最近の研究によると2種類に分けられる。1つは積石塚の石棺墓が圧倒的に多く、もう1つは小型の石棺墓と土坑竪穴墓があり、前期と後期の区分が明確に現れていることである。前期は合葬墓が多く、埋葬品の多くは石器や土器で、玉器は見られない。こうした墓は少数に属する。後期の墓は山陵のような迫力がある。その大きな墓の下方には順序良く大小異なる形の石棺墓が並んでいて、それらには“玉だけが葬られ”その他の副葬品はみられないか、あっても僅かである。

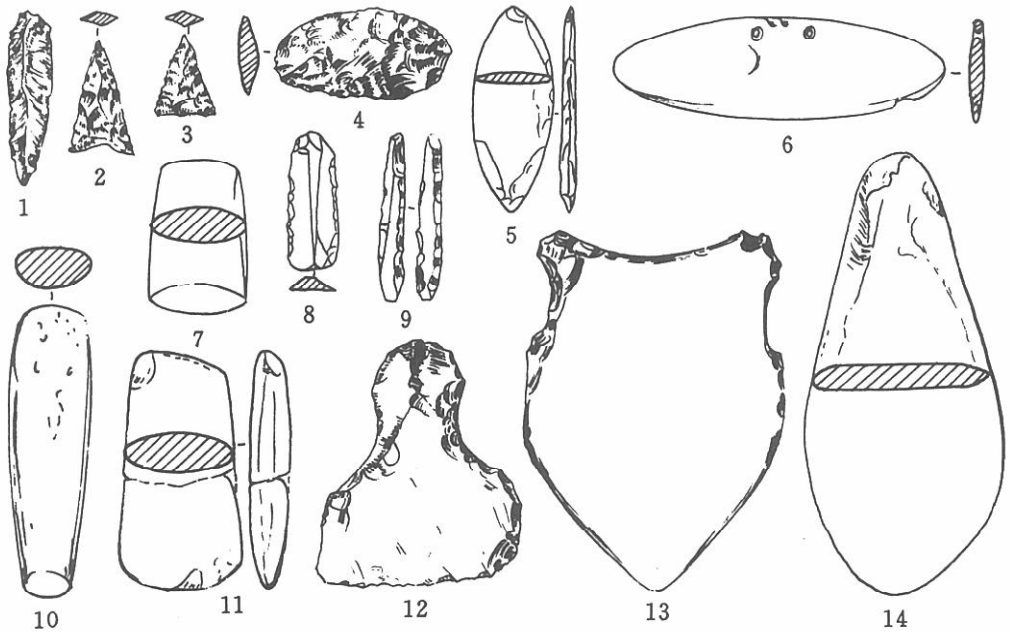


図1. 紅山文化の石器（1. 錐, 2・3石鏃, 4. スクレイパー, 5. 葉形石器, 6. 石刀, 7・11石斧, 8・9石刃, 10鑿, 12有肩石鋤, 13・14耜

3. 紅山文化と玉器

紅山文化の玉器は、解放前（1949年以前）にも多くの数が出土しているが、残念なことほとんどが海外に流出した。1970年代初めに、内蒙古の翁牛特旗三星他拉から玉龍

が出土し、学界の注目を集めた。その2年後には遼寧省阜新胡頭溝からも紅山文化玉器の発見があった。

特に1970年代以来、遼寧凌源三官甸子村の城子山石棺墓から出土した馬蹄形の玉箍と、勾雲形玉佩に代表される一連の玉器は、遼寧省の考古学者やその他の学者たちをして、器形の比較と出土状態を合わせることで、これらの時代が商代や周代、夏代でもなく、さらに早い紅山文化に属すると大胆に推論させた。そのときの研究成果は1981年に杭州で開かれた中国考古学界の第三回年次大会で公表され、1984年8期の『文物』誌に発表された⁽³⁾。

ここにきて、紅山文化の文明要素は大きく注目されることとなったのである。紅山文化の玉器が確認されて以降、人々は玉龍の起源についての考証を深め、また、その工芸技術に対する分析を行った。

1990年代初めの紅山玉器の大量出土により、紅山玉器に関する研究は考証および比較から、器の種類に関する具体的な研究へと転換した。これらの研究の多くは、ある器種に関する形態構造という角度から始まり、当該玉器の製作意図や反映されている思想や寓意、玉器の使用法や用途を検討するものであった。

1990年代中頃、紅山文化の玉器研究は更なる発展を迎えた。玉器の類型と用途に関する総合研究や考証だけでなく、紅山文化の玉器の特徴や彫刻の芸術的風格、トーテム崇拜に関する研究も始まり、玉器と中華文明の起源との関係についての探索が行われた⁽⁴⁾。

紅山文化の玉器が確認されて以降、そして新石器時代の考古研究が発展するにつれて、紅山文化の分布地帯の中華文明の起源における地位は日増しに向上した。

1970年代から80年代にかけて、著名な考古学者、蘇秉琦教授が1960年代の模索と理解を経て、中国考古学文化の区系と類型に関する学説を発表した。「区」とはかたまり、「系」とは筋、「類型」とは枝分かれで、中国に960万km²の土地が広がり56の民族がいるといった事実に基づき、現在、人口が密集している地区の考古学文化もまた、6つの大系に区分できるとした。

これによると、紅山文化は六大分布の1つ、燕山南北の長城地帯を中心とする北方に分布する⁽⁵⁾。考古学者は中国文明の起源における紅山文化の地位を確実に引き上げ、新石器時代における紅山文化の重要な地位と役割について、その後の考古学的発見によって更なる実証を進めた。蘇秉琦教授はある考古学研究会で、文化と歴史の発展の連続性から、燕山南北の長城地帯を中心とする北方地区がわが国の文明史上において特殊な地位と機能を持つと高く評価した⁽⁶⁾。

蘇秉琦教授は、わが国が統一した多民族国家を形成した一連の問題がもっともこの点に集中して反映されていると考え、秦以前も同様であるだけでなく、それ以降も、「五胡乱華」(匈奴、鮮卑、羯、氐、羌が中華を乱すこと)から遼・金・元・明・清の時代まで多